

1 はじめに

陽虚証（難経・64難）の治療に取り組んでいるうちに、陽虚証と思っていた患者の中に、かなりの確率で慢性的な悪血（肝実）があることに気がきました。

経絡治療は「気」一元論的考えが強く、気の調整（衛気なのか榮気なのか不明のまま）で総ての臓腑経絡を調整しようと学んできました。

経絡治療家は「気」のみを語り、湯液家は「悪血」のみを語ると言われていますが、一つの病体を見てその認識が違うということはないはずです。我々も悪血をしっかり見て行かなければ成らない。

本会発足以来、臓腑の生理作用を学習するに至り、漢方鍼治療において、気のみならず血や津液の概念の導入が重要であることを痛感しました。しかし血（特に悪血）についてはまだまだ不明な点が多く残されていますので、一症例を通して肝の蔵する血（特に悪血）の病理を学習し、臨床の幅を広げたいと思います。

2 悪血とは

まず最初に、悪血とはどういうものかについて話さなければなりません。

悪血とは、血が臓腑や経絡内に停滞したり、経脈から離れて停留した物質である。

人体は水穀の精微と自然界の精気などを原料に、気・血・津液を生成代謝しています。しかし、気・血・津液の代謝において、気・血・津液の生成原料である飲食の過不足や精神的肉体的過労・外因（六淫）・内因（七情）が人体を侵すと、気の代謝障害として気滞・血の代謝障害として悪血・津液の代謝障害として痰飲が発生します。

今回は血の異常代謝物質である悪血に焦点を絞り、話を進めます。

※血の代謝に関係する臓腑の生理作用

心……血脈を主る。

肝……疏泄作用・造血作用を主る。

脾……血の生成・統血作用を主る。

肺……宣発・肅降・水道通調を主る（この中でも悪血に関しては、水道通調作用の低下が関係すると思います）

3 病理（悪血の形成）

悪血の病理を知るためにはその悪血が形成される原因をはっきりさせなければならない。

古典医学では、悪血の形成過程によって、気虚血悪・気滞血悪・血寒血悪・血熱血悪に分類される。

① 気虚血悪（陽虚証）

原因……飲食の不節制による栄養不足（単なる摂取不足のみならず、しっかり食べていてもバランスの悪い食生活、つまり代謝栄養素の不足によりおこる）。

気（陽気）…エネルギー…代謝栄養素と、

形（陰気）…味…カロリー栄養素のバランスの不調

脾胃の機能低下による消化吸収作用の低下、及び統血作用の失調。

過労や慢性疾患によって心気・肺気・宗気などが不足する。

病理……血を推動する働きが低下して悪血が形成される。

気が不足して血を生成出来なくなると、気血両虚となる。気虚は総ての病の源泉、病気なる所以。

肺が血脈を集め、管理調節する作用は「百脈を朝ずる」、「治節を主る」といわれる。

② 気滞血悪（陽虚証）

原因……飲食の不節制。

七情の乱れによる肝気の鬱滞。
外邪（寒・湿邪）による経脈の渋滞。
寒邪…痛み 湿邪…シビレ・麻痺
異常代謝物質（痰・血）の経絡流注の阻害。
打撲・捻挫等による損傷。

病理……肝の疏泄作用が失調し、衛気榮気の昇降（上下）出入（内外）運動の低下により引き起こされます。

気めぐれば血めぐるとの言葉通り、気血は相互に依存する。気は血の生成や運搬に関与し、血は気を養っていますが、長期に及ぶと悪血となる。従って気滞＝悪血とも言えるのではないか。

③ 血寒血悪（陽虚証）

原因……寒邪・湿邪の侵入や心陽の衰退。

寒性の飲食物の過剰摂取。

慢性的な寒病症（陽虚証）、外傷（打撲、捻挫）による血行障害。

病理……血脈が冷えて凝滞し、血行障害を引き起こし悪血を形成。

以上、気虚血悪・気滞血悪・血寒血悪はいずれも陽虚による寒病症を伴います。

④ 血熱血悪（肝実熱証）

原因……辛味・鹹味の過剰摂取。

肉・魚などの濃厚な味のものの過剰摂取。

酒の飲み過ぎ。

病理……熱邪が血液を煮詰め、血熱が結聚して悪血が形成されます。

熱邪により経脈中の血行が過剰となり、脾気の統血作用の失調と重なり血が血管外に漏出し、悪血を形成します。

脾の精気虚に熱邪が加わると、脾の津液を乾かし、肝の血熱となり、悪血を形成します。

4 病症

悪血が形成されると、代謝障害（血行障害）を引き起こし、疼痛・出血・積聚等がおこる。しかしこれらの症状は悪血以外の気滞や痰飲が原因となることもあるため、悪血が原因となって現れる症状の特性を次にあげる。

① 疼痛

古典医学では通ずれば即ち痛まず、不通なれば即ち痛むと言われており、経絡系統の滞りが疼痛を発生させると考える。経絡系統を渋滞させるものは、気・血・津液の異常代謝物である気滞・悪血・痰飲である。気滞では脹痛、悪血では刺痛、痰飲では重痛がおこるとされる。

このほか悪血による疼痛は、固定痛で疼痛部位が移動することは少なく、もむとかえって痛んだり、夜間じっと動かないでいると、経絡の運行が低下して痛みが増します。

② 積聚（腫塊）

腫塊は悪血によるものと気滞によるものがある。特に腹中の腫塊は積聚と呼ばれて、悪血による積と気滞による聚とに区別される。気滞による聚は移動しやすい。悪血による積は固定して移動しない他、押さえると強い痛みがある。

③ 出血

悪血による出血は血液の色が暗紫色で、ときには血塊が混在する。

④ その他

顔色は浅黒い。皮膚は乾燥して光沢が無く・理が荒い。皮下の血脈には細絡、チアノーゼがある。便秘（堅くて黒い便）・小便自利・尿閉・残尿感もありなど。

5 症例

この患者の病証は脾胃・肝胆。腹証は脾虚肝実。脉状は浮大虚とも沈弦実とも見え、浮沈の幅が広く胃の気の位置が捕らえにくい。脾虚陽実か、肝陰虚か？と非常に迷った。とりあえず脾虚肝実（熱実）として治療してみた。結果オーライであったがはたしてそれで

良かったのか。

① 初診

初診は平成8年3月13日、患者は34歳の女性（未婚）肩こり・偏頭痛・足腰の冷え・痛みで来院。この時の脈状は沈・遅・実・洪（しょく）・細。脾虚肝実で2回の治療を行い諸症状の改善をはかる。

この同じ患者が、2カ月後の平成8年5月7日に来院、二日前にニンニクのしっかり入った焼き肉を食べに行ったところ、激しい偏頭痛・嘔吐・下痢・腹満・食欲不振・発熱（38度）・鼻閉を訴えて来院しました。

② 問診

既往歴→16歳で虫垂炎の手術。この時右卵巣も摘出（卵巣摘出の原因については本人も知らない。手術の失敗かそれとも最初から卵巣に問題があったものを虫垂炎と間違っただのかは不明）。

25歳の頃職場でのストレスで鬱病になり、会社をやめて1年半程静養しました。

③ 切診

腹診……腹部全体が膨満して軽く触察しても抵抗感が有り、右季肋部から臍の周囲にかけて筋性の抵抗と圧痛が顕著。

切経……両側下腿胃経と胆経に圧痛と硬結があり、右肩甲骨内縁に硬結と圧痛（私の臨床経験ではここに圧痛と運動痛が有るときは必ず脂肪肝や肝機能障害等があります）。

脈診……これが問題となるのですが、脈所に軽く指を当てると、浮・大・虚・数であり、中位では胃の気が無く、さらに按压しますと沈位では沈・弦・実・数の脈が感じられます。この沈位の脈がこの患者の病脈と見ました。

③ 証決定

病証は脾胃・肝胆にまたがる。

腹証は脾虚肝実。

脈証は右関上脾虚、左関上肝実。いずれにしても沈位の脈が悪血を示す問題の脈で有ります。

証決定は脾虚肝実としました。

④ 治療

太白・太衝に補鍼、太衝の補鍼は気の滞りを流す目的で長めに補いました。

臨泣・陽谿に瀉鍼、右期門・肝兪・右・・に抵抗が緩むまで瀉鍼。

6 考察

① この患者は、手術や職場でのストレスが肝気の滞りを招き、肝の疏泄作用の衰退が慢性化して悪血を形成。そこに飲食の邪（焼き肉・ニンニク・酒等による濃厚な味と辛味による熱邪）が侵入し、胃（胃熱）を招き、その熱が隣接する胆に波及し少陽経（偏頭痛）から表裏の関係にある肝に伝変、悪血に熱が加わり熱実となり上記の症状が現れたものと考えました。

② 急性消化器疾患と肝実（悪血）と言う題名で詳録を提出し、当初、悪血＝肝実あるいは肝実が有れば必ず悪血が有ると言う認識の下に症例報告を行おうと思っていましたが、その後、学習するに従い悪血に対する認識の間違いに気付かされました。

もちろん悪血そのものは血の停滞によって発症しますが、気虚や気滞によって血を動かす力が衰退して悪血が形成されるのです。

つまり、気巡れば血巡る、あるいは血が巡らないために気に栄養を送ることが出来ずに気滞が起こる。この様に陰陽・気血は相互に依存しあい協調しあって身体を構成していることを改めて痛感しました。

③ 副題に胃の気の衰退と悪血としましたが、飲食の不節制による代謝障害の多いことに気付かされました。便秘・排尿障害・発汗異常などを主訴として来院する患者は少ないので盲点となっていました。これら気滞・血・痰飲・水毒（生体の70パーセントを占めると言われる水分代謝異常）等が発病因子となり、成人病や肥満などがおこることを考えれば、代謝障害による胃の気の衰退を見逃すことは出来ません。

我々鍼灸師は病体を鍼のみで改善しようと言う傾向が有ります。

「医食同源」の意味を重く感じ、真のヒーラーをめざし、胃の気の源である栄養指導も病苦除去に重要な役割を果たすものと考えています。

④ ここ数年、陽虚証の症例に対して、難経・64難を応用して、陽経からの選穴が問題になっていますが、私は頭が固く、「病は五臓精気の虚より発生する」陰主陽従説を拭うことが出来ず、陽経選穴の方向に危惧を感じていました。しかし、食生活の乱れによる胃の気の衰退や臨床の現場において、陽経選穴により胃の気脈の改善が見られることを考えたとき、胃経（胃の気の捉え方）が重要であることを感じています。

以上、陽虚証について臨床追試して行くうちに、代謝障害による悪血にぶつかり、悪血を研究していると胃の気の衰退、つまり現代社会における食生活の問題（高カロリーの栄養失調時代）を考えるに至りました。

その結果「水穀の海」である胃が果たす役割の重要性へと発展し、「脾胃一体論」たる胃の性格をも考えたとき、陽経選穴の妥当性を認める結果に至りました。

参考・引用文献》

『臨床に生かす 古典の学び方』 池田政一著 医道の日本社

『臓腑経絡からみた薬方と鍼灸』 池田政一編著・監修 漢方陰陽会

『難経の臨床研究』 勝浦甚内著

『難経本義大鈔』 森本昌敬斎玄閑著 漢方鍼灸会編

『やさしい中医学入門』 関口善太著 東洋学術出版社

『中医学の基礎』 平馬直樹・兵頭明・路京華・劉公望監修 東洋学術出版社